

ドナウ通信

No. 47

目 次

東西政治の風景	盛田 常夫	2
補習校便り		9
随想		
ちょっと気に入った出来事	北野 弥生	11
自慢の先生	秦 耕子	12
貴重な体験	近藤 千洋	14
20世紀を創ったハンガリー人列伝（その五）		
「レオ・スィラード」	マルクス・ジョルジュ	15
大使館便り		35

東西政治の風景

盛田 常夫

森首相の退陣騒動や小地主党トルジャン一家をめぐるスキャンダルを見ていると、政治家の資質、習性、資産形成の具体的な姿が垣間見えて見えて、興味深い。「政治は男の究極の道楽」というが、本当に金がかかる道楽だ。支配欲と物欲が男の闘争本能を駆り立てるのだろう。彼らが動かしているその金ば、皆、国民の働きが元手。ところが、税金である会社の献金であれ、いったん国や党に納めてしまったお金は自分のものだという感覚をもてない。だから、湯水のように使われても、国民は無駄使いを糾弾する義憤にかられることもないし、政治家は政治家で毎日、料亭で会合をもち、それがあたかも政治家の特権のように振舞っている。

総理官邸や党本部があるだろうに、どうして毎日、ホテルや料亭に集まる必要があるのだろうか。与党・政府の会食費は官邸機密費から出ているのだろうか、誰も懐が痛まない。三六五日の会食に毎日一〇〇万円使っても機密費の一割も消費しないだろう。党本部が出すお金も、銀行協会などの企業献金が元手。誰も自分の懐を痛めるといふ感覚がないから、使い放題。機密費流用の背景には、この種のお金の性格が大いに関係している。誰も懐を痛めないから、いったん付いた予算の費消には経済倫理や社会倫理が働かないのだ。この面では、日本であろうと、ハンガリーであろうとまったく同じ。ただ、経済の規模が大きいだけ、日本のお金の動きはハンガリーの一〇倍から三〇倍が相場になっている。

しかし、「先進国」中で日本のお金の使い方が特別だとも言われる。他の国も同じようにやっているのだろうか。それとも、やはりこれは日本の政治の後進性を如実に示す現象なのだろうか。

「政策なしのプロトコールだけ」
今に始まったことではないが、最近の日本の外交を見ていると、「中身がなくて、形だけ」という印象が強い。沖縄サミットを見てもそうだった。沖縄で開催するのなら、沖縄の基地問題や東アジアの安全保障をテーマに入れなければ意味がない。しかし、最初から政府にそのような意思はなかった。普天間基地の代替施設建設使用一五年限という沖縄の要請についても、「沖縄県は一五年限の意向をもっています」と伝えるだけで、まるで子供の使い。最初から期限をつけるのは無理だから、交渉できないという態度だ。安全保障問題は、アメリカの政策に何の異論もございません、ごもつともでございますという無策。日本の外務省

がアメリカ国務省極東支部と揶揄される所以だ。

こういうことだから、沖縄サミットはただの貸席。中身はゼロ。膨大な労力とコストはすべて会場設営、観光プログラム、食事メニューに注がれた。これはこれでたいへんな仕事だが、サミットは首脳の観光旅行じゃない。こういうことから、クリントン大統領などは半日の滞在で、日本を離れてしまった。内容がないことが分かっていいるから、中東和平で点数を上げた方が良く、かろうじて、日本通のシラク大統領に料理を誉めてもらったのが、唯一の得点だろうが、情けない。これが今の日本外交の現実だ。

しかし、プロトコールだけというのは、何も政治家や外務省だけのことではない。日本のほとんどの国際活動にかかわる基本問題だ。その典型的な事例が、サッカーW杯招致。日本サッカー協会の代表は決定にい

たるほとんどの会議で積極的に発言することなく、裏のコネ回しで単独開催が転がり込むと踏んでいた。もともと国際会議で発言するのが苦手な人たちが大事な役員を勤めているのが、日本のスポーツ団体だから、仕方がない所もある。だから、お金で裏工作して、何とか発言力のある人の後押ししてもらい、自分たちの要求を実現するという行動様式になる。当然のことながら、この種のプロトコールにもお金がかかる。

W杯の国内呼称を「日本 韓国」にするのか、「韓国 日本」にするかも、その延長上の問題。自分の意見を最後まで粘り強く訴え、それを文章に残すという国際会議の常識的な行動がとれないから、曖昧なままに相互了解と勝手に理解している。そんなことが国際交渉の場で通用するはずがない。

機密費流用の背景

とにかく、日本の政治や外交にはプロトコールが多すぎる。もっと簡素に迅速にやってもらいたい。首相や大臣の外遊となると、各省から大勢の付き添いが参加し、受け入れる側の在外公館も、他国に駐在している外交官の応援まで動員して、朝から晩まで数十台の車の手配や配列を繰り返し作成する。分刻みでプログラムを作成し、それを毎日、何度も確認する仕事をする。まるで大行列。もちろん、これにかかわる費用や時間は馬鹿にならない。

西欧の大臣などは、OPECの会議にタクシーで乗り付けるといふ。何もベンツを借り上げる必要はない。無駄な労力やコストが削減される。ところが、日本の場合にはそうはいかない。政治家は政治家で、言葉ができないから、一から十まで助けがいる。朝食は日本食でないと駄目だといふので、大使館の奥さん方が早

朝から朝食作りをやる。もつとも、そのために赴任する外交官の夫人には手当てが出ている。こういう世話の焼ける政治家は、「先進国」では日本だけだろう。

民間企業にも無駄なプロトコールがたくさんある。つい最近まで、某大手都市銀行頭取が東京から大阪に向かう折、中途の名古屋駅のホームで、名古屋支店の若い女性行員から花束を受けるといふプロトコールが入っていた。さすがにもう廃止されたようだが、会社の社長が政治家の大名行列の真似をするようになってはおしまいだ。銀行がリストラを迫られたのは自然の成り行きなのだ。身近な例もある。すでに潰れてしまった某都市銀行は、八〇年代からハンガリーの銀行に出資し、駐在員を置いていた。九〇年に赴任した某駐在員は着任一ヶ月目に泥棒に入られ、こんな国には住めないということで、ウィーンに一家ごと越してし

まった。平日はケンピンスキーホテルに滞在し、週末はウィーンに戻るといふ生活だった。以後、九〇年代に着任した後任の赴任者はこれに習い、家族をウィーンやロンドンに置き、平日はハンガリーのホテル暮らしというパターンをとるようになった。余程儲かっている銀行かと思っていたら、倒産してしまった。一事が万事という諺がある。

体制転換後にウィーンにいくつかの都市銀行の駐在員事務所が開設された。情報収集の機能は半分にも満たず、残りは役員のウィーン観光のためにあつたようなもの。ニューイヤークンサートのチケットを確保するのが一大仕事で、観光シーズンともなれば、案内が主要な仕事になっていた。だから、本社のリストラが進むにつれ、一つ二つと自然に消えてなくなった。こういうバブルは消えて当然。札束を切って歩くような成り上がりの振る舞いは、もう通

用しないということだ。

松尾室長の機密費流用は、まさに肥大化したプロトコール費用に源泉がある。ふつうの会社で考えられないような巨額のお金がいとも簡単に流用されるといふシステムに問題はあるが、それよりもプロトコールを簡潔にして、税金の使い方を改めてもらいたい。それが問題の本質だろう。

日本人の国際的な場での行動は、お金ではなく、政策や意見で一目を置かれるようにならないといけない。「日本人は黙ってお金をだす」という評判は、もうバブル崩壊で終わりにして欲しい。そうなるまで、まだどれだけの時間が必要だろうか。

官も民も「ゴルフ・ポケ」

原潜衝突事故発生時の行動が森首相の政治生命にとどめをさした。これで支持率は一〇%を切ってしまった。逆にそこまで辿りつくと、ちょ

っと待つて欲しいと言いたい。

ゴルフをすぐに止めなかつたのが問題なのか、賭けゴルフをしていたことが問題なのか、そもそもゴルフをしていたのが問題なのだろうか。接待ゴルフの最中に、会社に事故が起こったら、ふつうの役員や社員はどうするだろう。もう後三ホールほどで終わりだから、最後までやっちゃおうとは思わないだろうか。どうせすぐに出発しても、ちよつと遅れもたいした違いはないだろうから、それより賭けの精算もしなければならぬ。

自分の子供の事故だとどうだろう。すぐにゴルフを止めて病院に駆けつけるだろう。現金なものだ。自分の個人的利害に関係することを優先するのが、ふつうの人間行動。

だから、森首相にしてみれば、ふつうのことをしているのに、どうして俺だけがバッシングされるのかと思っているだろう。何も特別のこと

をしている訳ではないという思いが捨てきれない。その意味では、確かに一国の指導者という気概に欠けている。何度バッシングされても行動様式が改められないということは、知性や感性に欠けるといことだろう。

しかし、これには亀井政調会長が声高に叫んでいた。「聖人君子が政治をやっている訳ではない。そんなことを言ったら、誰も首相になれない」と。それも一理ある。大体、町人国家の日本人は、知恵はあっても、知性が高いとはとても思えない。森首相など、支援者に気を使い、付き合いを大切にし、ふつうの人以上に気を使っている日本人だろう。その付き合いの良さと、弁論部で鍛えた詭弁と青嵐会という体育会系の睨みが、派閥の長に押し上げた。そういう人が首相になってはいけないということになる、自民党にはなり手がいないということか。

新聞報道によると、フィリピンのアヨロ政権誕生のその日、日本大使は日本商工会のメンバーやフィリピンの国務大臣とゴルフ大会に参加していたという。大使の弁が奮っている。「ゴルフは仕事で、遊びとは考えたことがない」と。ゴルフが好きならそう言えば良い。何も仕事だとか、スポーツによる健康管理などと理屈を付ける必要はない。ゴルフは仕事でもスポーツでもない、ただの遊び。楽しいからやる。それで良いではないか。理屈を付けるのは滑稽。

そもそも一国の政権が大衆運動で倒れようとしている時に、良く呑気にゴルフなどしているらるものだ。その脳天気の問題なのだ。これも自分の生活や会社に関係ないからだろう。フィリピンの国務大臣も参加していたから公務だなどと言って欲しくない。政府が倒れようとしている時に、ゴルフしていらるような大臣がいたら、それは泡沫大臣だろ

う。それを後生大事に客人扱いする外交官としての眼が問われている。商工会も国際的な常識をもってもらいたい。「一時の駐在だし、俺のこころは政治と関係ない」という感覚は、国際的な場では通用しない。そうしたサラリーマンの行動が国際的な嘲笑の的になっている。つまり、官民も、ゴルフ・ボケ。一億総サラリーマン化して、ゴツアン体質になっている。これも日本経済の国際バブル現象だろうか。

森首相を批判する前に、国民は自らを質す必要がある。森批判はその後からにして欲しい。法政大学の諏訪ゼミの調査が新聞に発表されていた。今の若者は、「他人に厳しく、自分に甘い」と。若者だけではないだろう。

個人的に言わせてもらえば、KSDのお金に塗れた人や森首相のような神道推進議員連盟が「国家・国旗」法の成立に奮闘したことを忘れたく

ない。このような政治家に教育を語る資格など初めからない。弁論部出身や宗教団体をバックにする中身無しの恫喝型（体育会系）政治家は、もう舞台から下がってもらいたい。そのような政治家が日本の指導者である限り、日本は永遠に国際的な政治国家にはなれない。

アッティラ・スキャンダル

KSDの醜いスキャンダルも、すべて二名の政治家の所為として始末されそうな雲行きである。オルジャン政権の末期症状については前号で報告したが、事態はますます混乱化している。

小地主党内部の分裂を決定的にしたのは、トルジャンの息子アッティラの収賄疑惑である。これは贈賄側が新聞に暴露したことから始まった。小地主党が農業省を牛耳ってから、各種の外郭団体が設立され、資金流出のチャネルが作られた。その一つ

が「農業イノベーション財団」で、二〇億フォリントの予算がついた。ほぼ二年の間に、ここから一〇〇〇件弱の申請に補助金が支出された。ちなみに、補助金を受けた事業で、この二年間、成果が出てものは一件もないと新聞報道されている。小地主党関連の各種団体への資金を流す仕組みに他ならないからだ。

この財団から八〇〇万フォリントの補助を受けたある地方の会社が、農業省からさらに大きな仕事の発注を受けるために、財団の顧問弁護士（女性）に相談に行った。というのも、事業を受注するためには、アッティラに献金しないと駄目だという風評があつたからだ。この女性弁護士は APV（国家民営化資産株式会社）という国家機関の顧問弁護士でもあり、アッティラの友人でもある。要するに、小地主党系の弁護士だ。日刊紙 *Nepzava* に暴露されたのは、この弁護士と受注の仲介を求め

た業者の会話だ。受注を受けられなかったことへの仕返しに、業者が録音テープを公開した。

会話の自身は程度が低く、要するに、アツティラに献金する賄賂三〇〇万フォリントについて、どんな領収書がもらえるのか、もらえないのかという会話が延々と続く。最後に、その弁護士と業者が一緒に車でアツティラの邸宅(ブダケシにある豪邸)に向かい、弁護士はお金を持参して家に入り、業者は車の中で待機する。領収書を出す代わりに、弁護士はアツティラと一緒に門まで出て、車の中の業者に手を振ったという情景が説明されている。

この暴露記事の後、トルジャン農業大臣はサバデイ政務次官とともに、大臣・次官職を辞した。それ以外に、火を消す方法がないと判断したのだろう。しかし、この辞任はさらに大きな騒動を惹き起こすことになった。トルジャンの第一の子分であるサバ

デイは農業省を離れるにあたってかなりの機密文書を焼却し、トルジャンは後任大臣にやはり手下のゲーモティ・ゲーザを指名した。しかし、ゲーモティは激高し易く理性がないという信じられないような理由で、小地主党内部から強い反対に会い、妥協として、小地主党が出しているPhare担当の国務大臣ポロシユ・イムレが農業大臣を兼任することで、オルバン首相と話がついた。

ところが話はこれで終わらない。ポロシユが農業省に入って、心ある官僚から直訴された。農業省の予算から、地方の小地主党幹部に、各種の名目で定期的に資金が流されていると。すでにかんりの文書はサバデイによって焼却されたが、不法に資金を受け取った人物のリストが作成された。ポロシユはこのリスト(Annex版でページを超えるリスト)を公開する用意があると新聞で暴露した。これに慌てたトルジャンはオルバン

首相に会い、ポロシユ更迭を提言したが、今度ばかりはオルバンもこれを受ける訳にはいかない。「小地主党内部の事情で大臣を更迭する訳にはいかない」とオルバンは更迭を認めなかった。トルジャンは、「それは理解した。しかし、以後、ポロシユを小地主党の大臣とは認めない」と返答し、ポロシユを国会議員団から除名すると発表した。

ここから、小地主党国会議員団は完全に二つに分裂。二六名の議員はポロシユ除名の幹部会決定を無効とし、党大会の早期開催を提案した。そして、四月初め、トルジャンは突如、腹痛と称して入院。病室から党内宥和の呼びかけを出すなど、劣勢の回復に最後の知恵を絞っている。

弱者を苛め、強者を助ける

三月末、メデイアを避けていたトルジャン・アツティラは初めて「ユ」のインタビューを受けた。新聞で

報道された業者の会話テープ以外に、証拠はない。テープが証拠にならない以上、自分は無実で、すべてはトルジャン一家を陥れる謀略だと一方的に喋り捲った。あの父にして、この息子あり。アッテイラがブダケシに所有する八億七千万フォリントの邸宅建築費の出所を聞かれて、あれはふつうの一軒家で、一〇年以上の弁護士生活から得たものとさり言いつつ、あの豪邸がふつうの一軒家なら、庶民の家は犬小屋か。

トルジャン・スキヤンダルに隠れてしまったが、悲しいことに、小地主党大臣ノグラーディ大臣の車と衝突して命を落とした二名の若者の家族には、補償金が一フォリントも支払われないことになった。実地検分の結果、トラバントの運転手は、青ランプを点滅させた大臣車を十分に認知しえたと結論づけられ、大臣車に落ち度はないということになった。バラト湖沿いのあの道を一三〇キ

ロ以上のスピードで走っていた車に落ち度がないなど、どうして言えるのだろうか。警察も検察もどこが狂っている。

権力を握る者が公金を湯水のごとく浪費し、将来のある若者を失った家族は失い損。弱き者を苛め、強き者を助ける。ハンガリーの検察も警察も税務署も、大義とか正義とは無関係の世界だ。こんな不合理はいつまで続くのか。

ポシユタババンクの大スキヤンダルで、ウィーンに逃亡したプリンツに逮捕状すら出せないのに、エステルゴムのマジヤール・スズキの社長に手錠をかけて、TVで見せる。殺人犯の本名を公表することもなく、手錠姿も見せないハンガリーで、どうして簿外処理の嫌疑で曝し者にされるのか。ふつうのハンガリー人すら首をかしげる光景だ。この件は日本への一時帰国の後にハンガリーの友人たちから聞かされたものだが、大

使館や商工会はこうした被疑者の取扱いに抗議したのだろうか。アメリカなら黙っていないだろう。M.C諸国も黙っていないだろう。このような事態に出会った時に、先進国の中で無言でいるのは日本ぐらいだろう。だから、日本人や日本外交がなめられる。

補習校便り

補習校日誌(二〇〇一年一月～四月)

一月四日(月) 補習校に四名の子供達が転入。(全校児童生徒五四名) 一年荒木将臣君、四年荒木優衣さん・上坂桃さん、六年室本一樹君
一月二十七日(土) 毎年恒例のもちつき・俳句かるた大会。

今年も、早くから練習に励む子供が多く、熱戦が展開された。特に小学部一年の活躍が目についた。優勝は予想通り、中学部一年生チームであった。中学部は、来年度から百人一首もいいのではないかとのご意見を多数からいただいた。もちつきは、本当にお父さん方にお世話になった。昨年、長年愛用の臼が強力なパワーに粉碎され、実施が危ぶまれていたが、マジヤールズスキの谷野幸雄さんから秘蔵の臼(一〇〇年もの)を寄贈したい

との申し出があり、もちつきが可能となった。日本から臼の運搬、税関通過等でマジヤールズスキの関係者の方に本当にお世話になった。

二月七日(水) ブダペスト国際児童生徒俳句大会表彰式(大使館) 前号に掲載された俳句を糠沢前大使を中心に選考がなされ、優秀者が、日本語部門、ハンガリー語部門、英語部門で選ばれた。

日本語部門優秀賞

四年 吉原 翼
ドナウ川 雪どけ水で
あふれそう

五年 川本 彩友美
霜柱 踏んでジャリジャリ
楽しいな

六年 手島 慎平 君
夏の海 サンゴしようが
空のよう

このような機会を与えていただいた、日本大使館の越智書記官に感謝したい。

二月七日(水) 補習校に二名の子供達が転入。(全校児童生徒五六名) 三年塘 健介君、六年塘 将太郎君。
二月七日(水) 定例保護者会

今回の保護者会で、来年度より小学部五年・六年、中学部の授業が週二回から隔週土曜日も増え、授業時数が増えることとなった。社会科の授業がかなり充実するだろう。また高等部も新設された。

小学部一年～四年 火曜日・金曜日
小学部五・六年/中学部 月曜日・木曜日・土曜日(隔週) 高等部 水曜日・金曜日

二月一〇日(土) スピードスケート世界選手権大会(英雄広場)
ホンダさんよりチケットを寄付していただいた。初めてのスケート観戦に、興奮した。中学部三年の秦さん、近藤さんの手作りの日本の

旗が大いに役立った。本当に応援に力が入った。五〇〇メートルで三位に入った牛山選手にサインをいただいた。

三月二日(金)三井物産より絨毯の寄贈。

早速、図書室・コンピュータ室、教材室に敷くと、殺風景だった部屋が本当に豪華に見えた。吉岡さん・秦さんありがとうございました。

三月三日(土)ブダペスト国際柔道大会。

一日前にこの大会のことを知り、授業後に観戦する。シドニーオリンピック金メダリスト井上康生選手の技は本当にすこかった。

三月五日(月)個人懇談。

個人懇談で、言葉遣いへの指導を要請された。確かに過激な言葉をハンガリーに来て聞く。言葉遣いやあいさつについては、学校だけでできるものではない。家庭と協力

してどんどん進めていきたい。

三月二日(水)最終運営委員会
今年の運営委員会は、懸案事項も多く、資料作成を始め、本当に忙

しかった。私が毎回提出する学校レポートも会を重ねる毎に枚数が増えていった。手島委員長は、本当に大変であったのではないかと思う。

三月二三日(土)卒業式終了式。

伊佐敷公使、宮崎日本人会理事、成田書記官を来賓に迎えて、無事卒業式を終えることができた。

小学部一三名・中学部三名の一六名が卒業した。おめでとう。

さて、今回リスト音楽院の学生に依頼して、卒業式のBGMを生演奏で実施してみた。やはり生は、ひと味違うと思った。

四月二日(月)新学期開始。職員室大改造。

専任講師が増員となり、職員室手狭になったため、大改造を行った。以前とかなり雰囲気が変わった。

四月七日(土)二〇〇一(平成一三)年度入学式・第一学期始業式

松本和朗大使、森浩二日本人会会長、加藤理事官を来賓に迎え、小学部八名、中学部一三名、高等部三名の入学式を無事終えた。

新しく小学部に入学した児童は、岩谷 茜さん、上坂 緑さん、川辺 周くん、黒澤マリアさん、小林絵美さん、林 宇希くん、豊田 絃くん、宮崎元斗くんの8名です。おめでとうございます。

四月に転入児童・生徒が4名。(全校生徒六七名と過去最高の人数である。)

三年 村松孝訓君、六年 村松佳奈さん、中二 本 貴之君
高等部 本 亜由美さん

四月八日(日)日本人会ゲーム大会
補習校の子供のほとんどが参加し、楽しい会であった。

随想

ちよつと気に入った出来事

北野 弥生

一九九八年の秋から二年間、私はハンガリーのセンチシュという街で暮らしていました。センチシュは、ハンガリー大平原に囲まれた小さい街です。ブダペストからバスで三時間ぐらいのところにあります。この「ちよつと気に入った出来事」は、当時の日記を掘り起こしたものです。

二〇〇〇年一月二八日晴れ

腕時計のバッテリーがきれたので、近所の時計屋にいきました。その店は、客が三人入れば、いっぱいになるぐらい小さな店です。店のショウウィンドウには、中古の懐中時計が

いくつかと、昔風の金色の目覚まし時計が飾られています。店のおじいさんは水中眼鏡のような形の、おおきな仕事用の眼鏡をかけていました。バッテリーの交換は二分もかからないぐらいでした。日本ではこういう時、「一時間後にできます」と店員に言われ、一時間待ったことを覚えていたので、この速さは意外でした。ここは、ハンガリーの、しかも小さい街なので、三日ぐらいかかると思っていました。

目の前で作業をしていたので、時計屋のおじいさんのやることを、全部見ることができました。最後の仕上げに、医者を使う聴診器のようなもので、時計の音を聴いたのが、いかにも念入りで（職人の仕事だ）と、思いました。その音は拡張されていて、客の私にもよく聞こえました。ところで、わたしはその店で、萌黄色の時計のベルトを見つけました。ちよつと、もう古くなったベルトを、

新しいのに代えようと思っていた時でした。とても気に入ったので、さっそく買うことにしました。

「ベルトも代えたいのですが。」私のベルトを手にとってみたおじいさんは、

「これはきれいだ。まだ使えるよ良いベルトだ。良いベルトだ。」

と、しきりにうなずいています。（それはそうだけど、あの萌黄色の新しいベルトがほしいな。）私は擦り切れている部分を指差して、もう一度訴えました。

「でもここが。」

「いやいや、きれいだ。きれいだ。」

まだ、新しいのに取り替えることはない。」

おじいさんは私にベルトを売る気は、まったくないようでした。はじめは店の人の言葉としては、不思議な言葉のように感じました。その時、頭が下がるような思いがしました。

そういえば以前、こんなこともあ

りました。ある電気屋で、乾電池を買おうとしたところ、その店員はこのような言いました。

「残念だ。今これしか置いてない。でもこれは高すぎる。買ってはいけない。普通はもっと安いんだよ。他の店へ行つたほうがいい。これは、売れない。」

今日そのことを、また微笑ましく思い出しました。

ハンガリーでは、このように全く商売気のない店員がいて、時々びっくりします。また、ぶつきらばうで、ひどい接客をする店員にも出くわせば、また逆に、親切で丁寧な仕事ぶりの人にも出会います。その落差といえは天と地ほどもあります。

それはなぜかというと、人々がマニュアルにそって取り繕った自分ではなく、ありのままの自分で仕事をしているからだと思えます。良くも悪くも、痛快なほど「自然体」です。そして、「自然体」だからこそ、そこ

には、その人の人柄・ものの考え方・生活の仕方・生き方などが、直接表れていきます。これは、お店の店員にかぎらず、ハンガリーの学校の先生にも感じることです。そして今まで、いろんなハンガリー人の「自然体」に出会いましたが、今日出会った時計屋のおじいさんの「自然体」は、すてきでした。ちよつと、というか本当は、とても気に入った出来事です。

自慢の先生

秦 耕子

私の自慢の先生、それは Istvan Konya 先生である。私のギターの先生だ。

私とギターとの出会いは二年前に遡る。当時私はイギリスにある学校で寮生活を送っていた。学校にはギターのプライベートレッスンを取る事が可能で、私はギターに出会う事ができた。今まで数々の楽器を体験してきた私だったが、ギターという楽器は初めて手にし、触れる物だった。それまで私の中でギターという存在は憧れているスターなどが手にし、皆の前で自分をアピールする道具としか見えなかった。しかしどこか心の奥深くで、「あんな風にかっこ良く弾けたら最高だね。」と想っていたのだと思う。ギターを習いたい

と思い、イギリス人の男の先生に習う事になった。

そしてその後、私はアメリカンスクールに転校して、しばらくは慣れるのに必死だったが、アメリカンにもだいが慣れてきた頃、私はまたギターをやりたいという気持ちが高まり上がった。アメリカンスクールの音楽の先生によい先生を紹介してもらおう事に決めた。彼の名が Mr. István。アメリカンスクールの先生は

「数日後に彼のコンサートがブダペスト内で行われるから、きっと行つたらいいわ。」

と私に薦めてくれた。私は直ぐさま「是非彼の演奏を聞いてみたいです。」

と喜んで先生に答えた。

それから数日後、コンサートの日が来た。

その日は平日で、補習校の授業後に会場に向かった。会場は鎖橋から

遠くないペストの一角で大変趣がある古い建物の中の一室であった。もうすでにコンサートは始まっていてドアの向こうから、Renaissance & Baroque 時代のクラシック音楽が聞こえてきた。それはどこかで聞いた事のあるような、なぜだかながかしいメロディーだった。休憩をはさんで後半が始まり、会場となつているこじんまりとした部屋に入った。

そして生まれて初めて、私は今まで見た事の無い楽器を目にした。それはリュートというルネッサンス期に作られた楽器で、重さはギターよりもはるかに軽いが、昔のポリウム感が豊かだった。そして何よりも驚いたのは、普通ギターの弦は六弦なのに、リュートは二六弦だった事だ。先生は左手のわずか五本の指で弦を強く押え、右の手で二六本もの弦を自由自在に操っていた。一瞬見ただけでは一体何本の弦があるのかわからず彼はまるで魔術師のように見え

た。まるでリュートが彼の身体の一部になってしまったかのような錯覚に落ち入った。そしてその音楽を堪能した。それは先生に初めて出会った日であった。

今私は先生から色々な事を教わっている。先日、先生は私にこうおっしゃった。

「メトロノームなどこの世に必要ない。」

私もまさしく同感だった。きっと先生は、「音楽のリズムは自分で創つて行くもので、自分の感じるままに、イメージを膨らませ、自分なりの音楽を産み出しなさい。」そう私に言いたかったのであろう。

先生のレッスンを通して私は様々な事を知り獲た。リュートの魅力、リズムの成り立ち、そして何よりも音楽に対する真剣さだ。先生はルネッサンスやバロック時代の音楽を現代に再現し、毎週のように各地でコンサートを開いている。このような

素晴らしい先生に出会えた事はとても幸運だと思う。私もここにいる間に出来るだけ先生の音楽に触れ、学び続けたいと思っている。

貴重な体験

近藤 千洋

海外で生活する。ってどんな感じだろうと重いながらブダペストに来たのは約三年半前。住みなれた場所や友達と離れるのはつらかったが、海外での新しい生活を楽しみにしていた。しかし、いざ生活し始めたら、私が想像していた様な生活とは全く違い、日本に帰りたくなった。特にアメリカンの試験に落ちたのがつらかった。家にいた五ヶ月間は本当につまらなかつた。毎日アメリカ人の家庭教師が家に来て英語のレッスン。日本語で友達と思いつきりお喋りしてきたのは週二回の補習校のみ。毎日

同じ事の繰り返しで、日本に帰りたいという気持ちがあふくくらいだ。しばらくして、明奈ちゃんに来て、簡単にアメリカンの試験に受かった。彼女は海外生活経験者だったけど、うらやましくてしょうがなかった。みんな私が学校に行けないからといじめられるのではと思ったこともあった。

しばらくして、アメリカンの試験に受かって学校に通い始めた。当時はまだ英語がうまく理解できなかったが、色々な国の子と友達になった。日本の学校とは違った雰囲気だったが、すぐに慣れた。七年生の時のクラスは私しか日本人がいなくて最初は不安だったが、今思えば、あの一年で私の英語力がかなり伸びたと思う。八年生の時も一人だった。でも、そこで今では親友と呼んでもいいくらいの友達に出会えた。この様な体験はもし私が日本にいたら絶対にできなかっただろう。時々、海外で生活

できるなんて恵まれていると言われるけど、それは本当だと思う。別に自慢しているのではない。英語を話せるようになったこと、補習校で小学校の低学年の子と遊んだりするのは全てここに来たから。私はブダペストでの体験は貴重だと思っている。ここで出会った人と経験は大人になっても忘れることはないと思うし、忘れたくない。

二 世紀を創った

ハンガリー人列伝(五)

マルクス・ジヨルジュ著

レオ・スライード

(スライルド・レオ)

1898-1964年

ハンガリー人らしいハンガリー人

「私は科学者として生まれた。多くの子供たちは好奇心を備えて生まれてくると思うが、私が科学者になったのは、幾分か子供のままに留まってしまうからだと思う」。兄のベラによれば、レオには四つの行動

指針があったという。

一 付和雷同するな

二 細かなことは他人に任せ、良く

考える

三 正直であれ

四 未来を見据える

「レオ・スライードこそハンガリー人の中のハンガリー人だった。ハンガリー人というのは、回転ドアに後から入って、先に出る人種なのだ。レオは徹底した非協調主義者だった。彼は他人を批判することを何とも思わなかったが、けっして退屈させるような罪を犯すことはなかった。いかなる場合においてもけっして曲げなかつた原則が一つある。それは、

期待にそうように努力しますと絶対に言わない」ということだった」。これは同じハンガリー人で、核開発の共同研究者であり、かつ外交問題では常に敵対していたエドワード・テラーの人物評である。レオの同級生のアルベルト・コロンディは、

「ドイツの詩人レッシングは、謙譲であるうとすれば、偽ることになる」と言っているが、レオは常に正直であるうとしたのだ」と注釈している。

また、ユージン・ウイグナーはこう言っている。「私は生涯を通して、非常に才能に恵まれた人々に会う機会があつたけれど、レオ以上に想像力が豊かだった人物を知らない。彼ほどの自立的な思考と意見を持っていた人物を知らない」。ちよつと低い声で、ウイグナーはこう付け加えた。

「私がアインシュタインも良く良く知っていたことを思い出していただければ、私の言っていることが良く分かるでしょう」と。

彼がすでにアメリカに滞在していたある日のこと、陪審員として声がかかった。殺人事件の審理が終わり、陪審員の採決が行われ、「有罪」一対「無罪」一となった。この一名はレオ・スライードだった。全員一致

が原則なので、判決は順延された。レオは被告にたいする犯罪証拠が完全に説得的なものでないと、他の陪審員を説得して回った。翌日、陪審員の採決は、「無罪」一名で、「有罪」一名となった。この一名はまたしてもレオだった。説得している過程で、彼は容疑者のアリバイに抜け穴があることを見つけたからだだった。

生い立ち

スピッツ・レオは一八九八年二月一日にブダペストで生まれた。家族は、一九〇〇年に、ドイツ語のスピッツ（「鋭い」）姓を、ハンガリー語のスイラルド（「固い」）姓に変えた。六歳の頃、レオはアンデルセンの童話で、白雪姫がケイに世界の半分と一足のスケート靴を与えるというくだりを読んでこう言ったという。「これは馬鹿げている。世界の半分には少なくとも数百万足のスケート靴が含まれているから、さらに一足

を付け加えるというのは馬鹿げている」と。

彼は科学に重点を置いたブダペストの新しい高等学校（レアル高校）に通った。一九一〇年頃、ブダペストに電気照明のニユースが伝わり、レオの関心を惹いた。一二歳の時にマックスウエルの電磁場理論にもとづくヴィクター・ゼンプリンの大学教科書「電気理論とその応用」を買い求め、そこに記されたすべての実験を再現し、無線交信の実験まで行った。一九一六年のエトヴォシユ学生コンクールでもレオは優れた成績を残し、数学で二位（一位はアルベルト・コロンディ）、物理学で一位（同率一位になったのは後のガンツ社長長のアンドラーシユ・イエンドラシツクで、コロンディが二位）だった。彼等三名はブダペスト工科大学に入学し、機械工学を勉強することになった。スイラードは例のごとく、ここでも批判的だった。

「ハンガリーで物理学を勉強するにはちょうど良い時期だった。というのも、大学の物理学コースはあまりにお粗末で、学生は自立した思考と独創性を発揮することを余儀なくされたからだ」。もっとも、伝記作家は、「面白いことに、いくつかの国で同じ教育手法を導入していたが、それが機能したのはハンガリーだけだった」と。

第一次世界大戦中、彼はオーストリアのクツフシュタインにあったオーストリア・ハンガリー軍の工学兵団大学に通っていたが、迫り来る崩壊を感じとって、病気だと偽り、家族問題も口実にして、ブダペストへ戻ってしまった。この頃、友人から聞いた逸話が彼の耳を捉えて離さなかった。

「停戦が決まったという噂は流れていたが、カルパチアン盆地の通信回線が切断されていて、ハンガリー軍のパトロール隊はいつものように

出発した。彼等が森から出た途端、ロシアのパトロール兵と鉢合わせしてしまった。双方の将兵とも銃を握り、その位置で凍りついたように立ち止まってしまい、数秒間の沈黙が続いた。すると突然、ロシア兵がニッコリと笑い、帽子に手をやって挨拶したのだ。僕の友人もこれに応え、返礼し、双方とも来た道を戻って行ったというのだ。で、その彼は、この日のことが悔やまれてならないと言うのだ。どうして僕から挨拶できなかったのか」と。この話が伝えるメッセージこそ、冷戦時代の危機に、スライドが大国の首脳たちに送った助言に隠されていた事実なのである。

ベルリンでの研究生生活

ハプスブルグ帝国崩壊の後、ハンガリーは民主共和国になり、それから社会主義政府が樹立された。租税と貨幣制度の新しい改革を宣伝する

ために、レオは兄のベーラと一緒にハンガリー社会主義学生連合を結成した。しかし、間もなくブダペストは外国の軍隊に占領されることとなり、右翼的軍事政権の発足によって、社会主義政府樹立に加わった人々には好ましくない状況になった。スライドは共産主義者の学生としてラストアップされたために、一九一九年一二月、ウィーンに逃れる羽目になった。

スライドはそこからさらにベルリン工学研究所に向かい、工学の研究を続けた。一九二〇年代のベルリンは近代物理学の中心だった。アインシュタイン、ラウエ、ネルンスト、プランクの誘惑に抗することはできなかった。こうして、彼は物理学者としてベルリン大学を卒業することになった。レオは講義を聞くことより、実験室やセミナーを重視した。ある時、プランクが理論物理学のコースを取るように勧めたが、スライ

ドは「僕は事実だけを知りたいのです。理論は自分で創り上げます」と答えている。また、数学的研究の利用について、デニス・ガーボルに、「僕は数学を勉強する必要はないと思う。必要なら、数学者にいつでも聞けるのだから」と書き送っている。レオが興味を持ったのは、一九二〇年代に新しいトピックとして登場した統計的熱力学であった。彼はノーベル賞を受賞したばかりのアインシュタインを説得して、このテーマでセミナーを開くようにした。このセミナーには、スライドのほか、アルベルト・コロディ、デニス・ガーボル、ジョン・フォン・ノイマン、ユージン・マウイグナーなどが顔をそろえた。ここから彼の生涯の関心テーマとなった統計的熱力学の発展が始まったのである。

学部卒業後、スライドはマックス・フォン・ラウエにアプローチし、博士号のテーマへの助言を求めた。

ラウエは相対性理論から派生するテーマを勧めたが、スライードにとつて難しすぎるし、あまり面白いとは思われなかった。やがてクリスマスが近づき、スライードはリラックスしていた。

「クリスマスは働く時でないし、まあブラブラしている時だから、何でも思い浮かんだものを考えることにした。暫くするうちに、相対性理論とはまったく関係のない分野であるアイディアが浮かんだ。長い散歩に出かけ、散歩の途中で見た何かを、家に戻って書き留めた。次の朝も、新しいアイディアが浮かび、散歩に出かけた。それが心の中に具体的になったところで、夕方にそれを書き記した。まるで奔流のように、アイディアが相互に関連し合いながら、理論全体を展開し終わるまで、湧き流れ続けていた。本当に創造的な時間だった。ある意味で、人生の中でもっとも創造的な時間だった。三週

間の間に、ある事柄について非常にオリジナルな手稿を作り上げた。でもそれをラウエに見せたくなかった。彼が要求したものはなかったからだ。アインシュタインのあるセミナーの後、彼に近寄り、見せたいものがあるのだがと話した。さて、何だろう。そこで、私が行ったことを話したが、アインシュタインは、それは不可能だ。できるはずがないと言う。でも、それをやったんですと言うと、じゃ、どうやってと聞き返した。アインシュタインがそれを理解するのに一〇分もかからなかったし、それをたいへん気に入った。これで手稿をラウエに見せる自信がつき、彼に会い、先生が望まれたものではなく、別のものを書いたのですと伝えた。彼は怪訝な様子だったが、とにかくその手稿を受け取った。翌朝早く、電話が鳴った。ラウエからだ。君の手稿は博士論文として受領された、と」。

スライードの論文は温度ゆらぎの熱力学理論を概観したものであった。熱力学の第二法則は、温度差を利用した第二種永久機関の存在を排除している。スライードはこの法則から、温度ゆらぎ式における基本的な定数の必要性を演繹することに成功したのである。彼はそれが、正しくも、ボルツマンの定数と同じであることを示した。彼は原子の存在を前提することなく、これを証明したのだ。この論文はアインシュタインを唖らせ、これを契機に二人の友情が永続することになった。

「スライードは実験室にほとんど行かず、庭のもたれ椅子に座って、思考していた。彼の主要な行動は友人と話すことだった。電話をかけたリ、カフェで喋ったり。彼はすべての人を知っており、物理学者にも生物学者にも喜んで助言していた。レオはあらゆることを議論し、論文によってではなく、言葉によって彼の

アイディアを伝えるのを望んだ」と、デニス・ガーボルは回想している。ベルリンではハンガリー人女性のエヴァ・ストライカーが催す社交的な集まりを楽しんでいた。彼女はマイケル・ポラーニイの姪にあたり、スライードはエヴァをポラーニイ家が生んだ最高傑作だと考えていたようだ。

「スライードの数学技量では同僚と太刀打ちできないので、理論物理学はたいへん居心地の悪い所だった」と、ウィグナーはコメントしている。実際、物理学理論にかんするスライードの論文数はそれほど多いとは言えない。

スライードはマックス・フォン・ラウエの理論物理学助手で、これは給料より名声をもたらすポジションだった。だから、スライードは発明でお金を稼ごうとした。良く知られている彼のアイディアは、圧縮ポンプ内に磨耗しやすい回転用固体部品

を使用しなければ、家庭用の冷蔵庫をもっと長持ちさせることができるというものであった。水銀を通して流れる直流電流に静磁場が及ぼすローレンツ力を使って、液体金属を廻そうと考え付いた。そこで、これを具体化するように、エトヴォシユ・コンクールで優勝を分け合ったアルベルト・コロデイに頼むことになった。コロデイはベルリンで工学を勉強しており、詳細な設計と計算を行い、銅に比べて水銀の電気伝導が劣ることから、磁氣的圧縮機は効率が悪く、という結論を出した。一週間して、スライードは考え直し、ナトリウムとカリウムの共融合金を使うことを提案した。室温でも液状で、良導体を形成するからである。コロデイの実験によれば、ナトリウムとカリウムは摩耗性が強く、ワイヤーの絶縁体を侵し、電流が気密容器に流れることが分かった。アインシュタインとの会話のなかで、スライード

はこうした問題点を投げかけてみた。数分ほど考えたアインシュタインは、気密容器のなかにエア・ギャップを作り、攻撃的な液体金属による絶縁体の腐蝕から、真空部分を守る装置を提案した。アインシュタインは、磁気コンプレッサーをアインシュタイン・スライードの名前でパテント申請することに同意し、スライードの財政的な状況を助けようとしたのだ。スライードは、当時のドイツで第二の電気工業会社で、デニス・ガーボルが勤めていた Allgemeine Elektrizitätsgesellschaft 社に、電磁冷蔵庫のプロトタイプを製作するように説得した。この会社はアルベルト・コロデイを雇い、この冷蔵庫を製作したが、冷蔵庫の効率はやはり低く、結局、このシステムは普及しなかった。しかし、磁気ポンプで運転される液体ナトリウムは、現在、高温の原子炉を冷却するために使用されている（とくに増殖型原子炉で）。

ついでに言っておけば、ベストセラ
ー小説 *The Hunt for the Red October* で
は、やはりこのアイディアが利用さ
れており、架空のロシア潜水艦がノ
イズを起こす回転モーターなしで運
転されることになっている。

発明家スライード

「彼は物理学者というより、発明
家であった」とは、ポンテコルヴォ
の言である。彼はマンハッタン計画
時代からスライードを知っている。
スライードのパテント・リストは相
当なものだ。磁気ポンプ（一九二八
年）に始まり、ローレンツが実際に
製作する前にサイクロトロンのアイ
ディアを出していたし（一九二九年）、
イオン化された放射線による不妊化
（一九三四年）や、嚴重に管理され
た条件におけるバクテリア繁殖の化
学状態（一九五一年）、婦人のための
家族計画時計（一九五一年）、原子炉
のフェルミ・スライード・パテント

（一九五五年）などの発明がある。

ベルリンでデニス・ガーボルと電
子顕微鏡の可能性について議論して
いるし、現在、我々が線型加速器と
呼んでいる装置についても構想して
いる。ガーボルが言うように、「もし
彼がすべての発明を成功するまでや
り通していたら、二〇世紀のエンジ
ンと呼ばれていたに違いない」。ノー
ベル賞受賞者のジェイムズ・フラン
クは、「スライードを冷凍庫に凍結
しておいて、新たなアイディアが必
要な時に引っぱり出すのが良い」と
言っている。

アインシュタインはスライードに
こう提案したことがある。「特許庁
に勤めないか。それが君にベストだ
と思うが。科学者が黄金の卵を生む
ことに依存しているのは良くないこ
とだ。私も特許庁で働いていた時が、
人生で一番充実していたよ」と。

しかし、生活のためであれ、政治
的な理由であれ、スライードは十分

な動機付けがないと、アイディアの
開発に固執することはなかった。

「子供の頃、私は物理学と政治に
興味を持っていた。この二つの分野
が重なり合うなどは考えて見もし
なかった。でも私がこうして生きな
がらえて来れたのは、政治的な方向
性を持っていたからだと思う」と述
べている。彼は反ユダヤ主義と政治
的パージのために、ハンガリーを離
れた（一九一九年）。一九二〇年代の
ベルリンではファカルティ・クラブ
に居を構えたが、彼の部屋には荷物
をまとめた二つのスーツケースが鍵
を付けたまま置いてあった。「状況
が悪くなれば、いつでも鍵を締めて、
出発できたからだ」。

一九三三年一月にヒットラーが政
権を取り、二月二七日に帝国議会が
放火され、共産主義者とユダヤ人を
弾圧する口実が造られた。三月三一
日にスライードはウイーン行きの一
車に乗り、最終的に同年の中頃に英

国に移った。ロンドンでの彼の主要な活動は、研究所を動かして、資金を調達して、ドイツから科学者が逃れるのを助けることだった。

生物学への関心

スイラードは次第に生物学へ向かい、それが理由で放射能に興味を抱くようになった。英国に移った彼は聖バルトロミュー医科大学病院のR.A.チャーマーズと一緒に仕事をすることになった。ここではラジウムを利用することができた。彼等は線の照射によってベリリウムから効率的な中性子源を造った。



この実験研究の過程で、「スイラー・チャーマーズ反応」と呼ばれるものを発見した。つまり、中性子を取り込んだ原子は、粒子を放出し、その反動によって分子結合からこれらの「熱い原子」が除去される現象である（この効果は分子のキャリア

ーなしで放射線同位元素を集める時に使うことができる）。大病院での実用的な成果によって、スイラードは原子物理学者と見なされることになり、オックスフォードのクラレンドン研究室に職を得た。そこで彼は、物質を極低温まで冷却することでエントロピーを抑え込む研究をしていたニコラス・クルティと、永続する友情を取り交わすことになった。

「スイラードは純潔主義者で、三〇年の間一人だけガールフレンドがいた。彼はシャイではなかったが、一度だけ赤面したのを見たことがある。三〇年のロマンスが実り、オーストリア人女性、トルデイ・ヴァイスとの結婚を祝福した時のことだ」。結婚前の数年はトルデイとレオはオックスフォードのクルティと一緒に過ごすことが多かった。クルティ教授は祝福のために、彼のキャツクを使って遠出をしたらと持ちかけたことがある。驚いたことに、レオは大

声で「Yes」と即答した。後でその理由が分かった。レオは泳げなかったのだった。

一九三三年九月一日金曜日の朝、インペリアル・ホテルのロビーで、スイラードは *The Times* の見出しに目をやった。

「原子を分解・元素の変換・中性子の新しい変換・あらゆる原子を変換する可能性」

それは英国協会におけるラザフォード卿の講演を報じたものだった。この時点で、レオ・スイラードは科学から歴史を創る仕事に入るようになった。

ラザフォード卿の「大言壮語」に触発され、創造力が高まったある朝、スイラードに中性子の連鎖反応のアイディアが閃いた。それを実現するために、化学元素をチェックして、どちらの元素が二個の中性子を放出するのか見つけたそうと考えた。スイラードは、 $\text{Ra} + \text{Be}$ 源から中性子を

造る専門家で、パラフィンの陽子と衝突させることでこれを見せることができた。しかし、ラジウムとベリリウムを借りるか、あるいは買うにしても、二〇〇〇ポンドは必要だった。彼はまず英国の物理学者に掛け合ったが、駄目だった。そこで、化学者や、中欧からの亡命者（マイケル・ポラーニイ、チャイム・ワイツマン、ユージン・マ・ウイゲナー他）に財政支援を頼んだが、成功しなかった。彼は広島原爆の後、この時のことを回顧してこう言っている。「多分、一九三四年のこの発見を逃したわれわれこそが、ノーベル平和賞の次期候補者であるべきだ」と。当時のスイラードの主要な成果は、英国のペテント番号 440023（一九三四年三月二二日出願）、630726（一九三四年六月二八日出願）、814236（一九三六年）として登録されている。スイラードは英国戦時局に、これらのペテントを非公開に

するよう頼んだが、答えはこうだった。「戦時局にかかわる限りで言えば、これらのペテントが特別な機密として保持される理由はありませぬ」（一九三五年一〇月八日）。しかし、スイラードは英国海軍本部を説得して、機密を保持させたのである。西欧では依然として、ヒットラーは共産主義に対抗する戦士として評価され、中欧の秩序維持に必要な人物と見られていた。レオが最後にハンガリーを訪れた一九三六年末、親族をアメリカに来るように急ぎ立てている。後にこうも言っている。「僕は翼よりルーツを大切にする。だが、ルーツが持てなくなった時には、翼を使う」と。一九三八年一月二日、彼はアメリカに渡った。一九三八年九月、英国、フランス、ドイツ、イタリアは、ミュンヘンにおいて、ドイツに有利なようにチェコスロバキアの平和的な分割に合意した。そして、一九三八年九月一日、

ドイツはポーランド侵略を開始し、第二次世界大戦が勃発した。

研究室はホテル

アメリカに着いたスイラードはコロンビア大学に職を得た。しかし、もう一人のコスモポリタンのハンガリー人で数学者のポール・エルドウスがそうであったように、ホテル住まいを続けた。これは典型的な異星人の行動であった。

「毎朝、九時頃にホテルのバスに入る。バスタブほど思考に適した場所はない。湯に浸り、考えるんだ。一二時頃にメイドがノックして、大丈夫ですか、先生なんて言う。そこで、風呂から上がり、ノートを取ったり、覚え書きを記す」。スイラードのアイデアはほとんどホテルのバスルームから生まれている。それはダーレムのホテルであったり、ウィーンのホテルであったり、ロンドンやカリフォルニアのホテルだっ

たが、とくにワシントンのデュポン・プラザ・ホテルのロビーでは、スイラードは少し高く据えられた肘掛椅子に座るのが常で、彼の知恵を拝聴に人々が訪れたものだった。現在、このホテルの玄関には、銅板の記念プレートが張ってあり、次のような銘文が読みとれる。

「ロビーからのロビー活動。レオ・スイラード、物理学者で生物学者にして平和伝道者は、このロビーのオフィスから、科学と軍備撤廃について、議会や行政にロビー活動を行った。曰く、私はこのロビーで楽しく仕事ができる。私は家を持つことはないし、その必要性を感じたこともない」

アメリカは異常なとも思えるアイディアを開墾できる豊かな土壌を育んでいる。スイラードもまた、ルイス・ロ・ストラウスのようなビジネスマンを説得して、中性子の連鎖反応の研究を援助させることに成功し

た。しかし、一九三九年一月初め、ニールス・ボアがニューヨークに到着し、ウラン分裂のニュースを聞いた時には、ほとんど実験を諦めかけていた。一九三九年二月五日、*The New York Times* 紙は、「わずかに可能な原子力発電」について報じた。これでハンガリー・コネクションがトツプ・ギアに入った。ユージン・マ・ウイグナーとエドワード・テラーが動き出したのだ。明らかにレオ・スイラードの差し金によるものだった。コロンビア大学では、スイラードとズインは、単一の中性子によつて誘発されるウラン分裂が数個の中性子を放出することを発見した。他方で、アンダーソン、フェルミ、ハンシュタインは中性子の増殖を確証した。

「当時、粒子の消滅と生成についてたくさんの議論があり、スイラードはその本質を証明したように見えた。我々はスイラードが同時に二つの場所に居ることができると確信したものだ。つまり、彼は一つの場所から消え、別の場所で生成されて現れることができるのだと」。

スイラードはウランにかんする機密を保持するように働きかけた。アメリカと英国ではうまく行ったが、フランスで失敗した。彼は非均質なウラン・黒鉛原子炉を設計し、その実現性についてフェルミを説得した（一九三九年七月三日）。次に、国立黒鉛会社と高い純度の黒鉛の入手可能性について、個人的に交渉した。フェルミは一九三九年七月コロンビアで、方向性を決めるための実験を開始した。他方、スイラードは一九三九年夏にエドワード・テラーをコロンビア大学に呼び、続いてウイグナーも来ることになった。彼等は、

今度は、アルベルト・アインシュタインを説得して、ルーズベルト大統領への歴史的な手紙を書かせた（一九三九年八月二日）。後にアインシュタインは、「実際、私はスライードのメール・ボックスのような役割を果たしただけだった」と述懐している。

スライードの論文「ウランと黒鉛で構成されるシステムにおける発散連鎖反応」は、指示があるまで公表差し止め付きで、*Physical Review* に提出された（一九四〇年一月三一日）。他方、スライードは行政当局と掛け合い、パイル（原子炉）プロジェクトを促進するように働きかけた。一九四一年一月六日の真珠湾攻撃を受けて、増殖炉完成の命を受けて、シカゴに冶金研究所（MET Lab）が設置された。一九四二年初め、スライードはシカゴに移った。

増殖炉の完成

シカゴではフェルミが仕事を組織し、ズインが増殖炉を建設し、ウィグナーが理論的な評価を担当した。時折スライードがやってきて、決めた方法とは違うやり方で、仕事を指示した。アーヴィン・ワインバーグはこう回想している。

「スライードはいわば科学のアップ（gadfly）のようなものだった。アメリカではあちこち歩き回って問題を起こして行く人のことをこう言うんだ。彼は非常にスマートに質問することはできたが、技術的な技量から言えば、ウィグナーとはとても競争できなかった。冷却に液状ビスマスを使えと頑固に主張して譲らなかった。もっとも、一つだけスライードの貢献があった。それは核分裂から出る速い中性子が原子炉内で²³⁸Uを分裂させることができることを強調したことだ」。

一九四二年一月二日、シカゴで、

人類が造った最初の自発的な連鎖反応に、ウィグナーと並んでスライードも立ち会った（当時、スライードはまだ法的にはハンガリー人で、一九四三年三月二九日までアメリカの市民権を取得しなかった）。キャンティがウィグナーからフェルミに渡され、これを飲み干したところでお開きとなった。スライードはフェルミと握手しながら、「こう言った。『この日が人類史の暗黒の日として記録されると思う』、と。

一九四四年一月一九日の出願にもとづき、フェルミとスライードはアメリカの原子炉パテントを取得した。このパテントは一九五五年五月一七日に発効し、アメリカ政府はフェルミとスライードから一ドルという名目的な価額でこのパテントを買い取った。以前に、スライードは中性子の連鎖反応にかんする英国のパテントで二万ドルを取得していたので、この取引には不満だった。「こ

の発明の実際価値をくれるか、まったくゼロかどちらかだろう」。この特許権の強制移転にはよほど我慢がならなかったようで、晩年になっても怒りが収まらず、適正な補償を要求していた。

スパイの嫌疑

このサクセス・ストーリーには隠された裏面がある。スライードはロスアラモスには好ましくならぬ人物で、戦後にも彼は排除されたことがある。軍の情報局はフェルミとスライードをきわめて怪しい人物とみなしていた。「エンリコ・フェルミは疑いなくファシストで、機密を要する仕事にこの人物を採用することは推奨できない」。スライード氏はハンガリーからのユダヤ人亡命者である。彼は発明家で、親ドイツ派であると公言しており、いろいろな機会にドイツの勝利を予想する見解を公にしている。機密を要する仕事にこの人物を

採用することは推奨できない」。

冶金研究所におけるスライードの雇用も非常に危ういものだった。マンハッタン計画の軍事司令官のグロウヴ將軍は、「スライードほど我々に問題を惹き起こした敵はいない」とこぼしていた。彼はスライードを拘留する提案すら行っている。当時のアメリカはハンガリー政府と友好的ではなかったが、それでもCIAは一九一九年初頭のスライードの疑わしい行動について、ハンガリー警察に照会していた。

スライードの行動は、戦時中を通して、情報局によって監視されていた。たとえば、一九四三年六月二三日の監視「対象」の行動は、ワシントンの軍情報局によって、次のように報告されている。

「対象とウイグナーは二階から階段で下りてくるのが観察された。ワードマン・パークのロビーを通過して、対象とウイグナーはホテルの外に出

て、テニスコート横のベンチに座った。そこで、コートを脱ぎ、袖を捲り上げ、外国語で話していた」。

スライードは人類がどこに向かっているのかを良く理解していた。「彼は世界の良心を代表する仕事を引き受けただけでなく、彼自身が世界の良心だったのだ」と、ジョージ・クラインは書いている。ウイリアム・ラノエツは、既述した情報局の報告を引用した後で、こう解説している。一九三四年は平時であったが、スライードはその先の戦争のことを考えていた。一九四四年は戦時であったが、スライードはその先の平和のことを考えていた。彼は原爆製造には直接に参加しておらず、原子炉に関心があった。彼は豊富に存在する ^{232}Th と ^{238}U を原子炉で分裂可能な燃料に転換することを提案し（一九四三年）、それに *breeder*（増殖炉）と命名したのだ。

空冷のオーク・リッジ原子炉と水

冷のハンフォード原子炉が稼動し、原爆のためのプルトニウムを供給していた。シカゴの冶金実験室にはもう仕事は残っていなかった。

政治家スライード

政治家としてのスライードは生きていた。シカゴ・パイル（増殖炉）が出来るまでは、とにかく核の連鎖反応を実際に惹き起こすことが彼の使命だった。しかし、ヒットラーが自殺し、ドイツが敗北した後は、原子爆弾の使用を阻むことが彼の使命になった。

スライードはルーズベルト大統領とトルーマン大統領にコンタクトし、日本の都市への投下を防ごうとした。そのために、アインシュタイン、ウイグナー、テラーなどの友人たちを必死に動員した。彼が準備した原稿にはこうある。「何時か将来、戦争で勝利するにせよ敗北するにせよ、人類の悲劇の歴史のこの部分が、

全体の悲劇に結びつけられるようになうだろう」。歴史が教えるごとく、彼の努力は実らなかった。一九四六年七月三日、シカゴ大学における公開講義で、スライードはこう結論づけている。

「ある化学元素を別の元素に融合させることは、周知のように、錬金術師に未解決の問題です。キュリー夫人はラジウムを造ったのではなく、たんに化学的に分離しただけです。だから、神は唯一無二の成功的な錬金術師として地位を保持していました。しかし、それからウランがプルトニウムに転換され、プルトニウムの最初の使用は都市を破壊する爆弾でした。プルトニウムの次の使用も、また同じでしょう。最初に成功した錬金術師は疑いなく神ですが、二番目に成功した錬金術師が悪魔でありはしないかと思うのです」。

スライードを含め、開発に加わった者には、広島と長崎に落とされた

爆弾はソ連に対する警告であることは、戦争終結前から明白なことであった。スライードはこの政策が二つの超大国間の核武装競争をもたらすに過ぎないと主張し、アメリカ大統領に訴えただけではなく、スターリンにもフルシチョフにも手紙を送っている。

一九六〇年九月二六日、スライードはワシントンでフルシチョフと会談した。当初、この個人的な会談は一五分と予定されていたが、二時間にわたった。この時、スライードは当時のヒット商品 *Mr. K (Schick)* の髭剃りセットをプレゼントし、「戦争が勃発するまで」、替え刃を送り続けると約束した。フルシチョフは「戦争が起これば、誰も髭は剃れません」と答え、替え刃の返礼にウオッカ一ケースを送りましょうと提案したが、スライードはウオッカに代えて、ポルズミのミネラル・ウォーターにスモーク・サーモンとキャビアのセット

を所望した。この会談は一〇月六日付け *Parade* の第一面のニュースとして紙面を飾った。ケネディ大統領とフルシチョフ第一書記とのホットライン設置は、誤解から生じる核のホロコーストを防ぐために、スライドがイニシアティブを取って実現したもので、この会談の成果でもあった。

CBSとNBCの二大メディアの企画として、二人のハンガリー人、レオ・スィラードとエドワード・テラーが「軍備撤廃は可能で望ましいか」をめぐって討議したことがある。双方とも、論理が究極の権威だと考えることでは一致していた。最初にスィラードが提案した。「テラー、最初に握手しよう、後だとできないかもしれないから」と。それにテラーはこう答えた。「スィラード、誓って言うが、君と握手するのは何時でも僕にとって嬉しいことだ。討議の後でも、僕たちの友情は以前と変わりないと

思うよ」。実際、そうだった。

両陣営の核放棄への信頼を醸成するために、どのような方法が望ましいかについて、スィラードは荒っぽいアイデアを描き続けていた。たとえば、ある国際委員会がアメリカ市民に百万ドルを提供してアメリカの協定違反を監視し、同様にロシア市民に同額のお金を渡してロシアの違反を監視してもらうというのがそれだった。また、敵が原子爆弾の使用を企てた場合に、その報復として、核ミサイルによって攻撃される都市のリストを、順位を付けて公表するという提案もその一つだった。さらに、核弾頭を装備したロシア兵をワシントンの地下に配置し、他方で同じアメリカ兵をモスクワの地下に配置して、相互核抑止(MAD, Mutual Atomic Deterrence)を保証し合うというアイデアもあった。ベルリン危機に際しては、もっと激しいロジックが展開された。

「ベルリン問題で全面戦争になると思うか」とテレビ番組で質問されました。私の答えはこうでした。ベルリン問題を解決するのに、どうしてアメリカが何百発もの水爆をロシアの都市に落とす必要があるのか、また同様にどうしてロシアがアメリカの都市に何百発もの水爆を落とす必要があるのか。明らかに、二つだけ爆弾を落とせば、問題は解決するが、その両方ともベルリンに落とされるだけです。そこで、ベルリンを破壊するだけなら、一つの水爆で十分ではないかと質問されました。しかし、それは機能しません。もし一つだけ落とされたとすると、ロシアとアメリカは誰がその原爆を落とすたかについて意見の一致を見ることができないからです」。

ヴェトナム戦争での両国の危機的な状況においても、スィラードの「異星人」的な激しい見解が見られた。彼はこう問い掛ける。「アメリカの

政治家はアメリカ国民に対する責任のみが、自らの責任だと考えている。結局、ロシア人は外国人だから。しかし、神は彼らを外国人だとみなすなどと本当に信じているのだろうか。アインシュタインは、「スライドは賢すぎる。彼は人間における合理的思考の役割を過大評価している」と評価する。外交官にたいするスライドの舌鋒が過ぎたので、スライドはこう尋ねられている。「貴方ハンガリー人は本当に異星人なのですか」。彼は微笑んで、「多分ね」と答えている。

イルカの放送

もつとも評判になったスライドの書き物は、ジョナサン・スィフトの寓話小説に似せた「イルカの放送」(The Voice of the Dolphins)である。核武装放棄の合理性を訴えるために、一九六〇年六月二七日に、小説の形で口述筆記させたものだ。

この科学小説でスライドは来るべく二五年間の歴史を予測している(たとえば、一九七〇年にイラクで左翼革命が起きるとか、ドイツの統一が一九八〇年に達成されるという具合に)。

物語では、ウイーンにイルカの知能を調べる国際研究センターが創設される。ロシアとアメリカの科学者の共同研究によって、イルカ言語の解明に成功する。人類の経験とイルカの知恵で様々な有用な発見が達成される。海草類から非常に安価な食料品を造ってタンパク質を供給すると同時に、人類の肥満を抑制したり、それが同時に第三次世界大戦を惹き起こす二つの深刻な問題を解決したりする。そこから得られた収益で、非営利の世界的なテレビ・ネット「イルカの放送」が創設され、人類にたいするイルカのメッセージが放映される。イルカは核非武装の管理されたシステムを提案し、それがあまり

にも合理的なので、公衆も外交世界も、この優秀な知力をもつ種属の勧告に逆らうことができない。最終的に、一九八七年、ウイーンで開かれた会議においてイルカの勧告が採択され、一九八八年に冷戦が終結する(二五年前の予測としては、たいへん優れていると言えよう)。イルカは賞賛され、メディアがこぞってインタビューに殺到する。ところが、予期せぬ疫病がイルカを滅ぼし、同時に発生した火災がすべてのフィルム化された文書を消却してしまう。ロシアとアメリカの科学者は帰国の途につき、それぞれの研究チームが他のイルカと接触を試みるが、成功しない。そして、この小説は次のように終わる。

「ウイーン研究所が本当にイルカとコミュニケーションできたのか、ウイーン研究所の異彩を放った成果にイルカが本当に関わっていたのかと、疑念を呈する人々がいた。自由の国

アメリカでは、誰もが好きなことを考え、話すことができる。しかし、ウィーン研究所がスタッフを構成していたロシアとアメリカの科学者の知識と知恵以上のものを引き出すことができていなかったら、どうしてそのような成果を達成することができたのか、理解できないだろう」。

この小説はデンマーク、フランス、ドイツ、ハンガリー、イタリア、日本、ロシア、スペインで翻訳されたが、後にスィラードは、著書の本意はイルカの知恵ではなく、人類の愚かさを描くことにあったと話している。

スィラードはこの著書をフルシチヨフに贈呈している。彼はまた、科学者間のコンタクトを広げるために努力した。第一回パグウォシユ会議（一九五七年）の共同組織者でもあったスィラードは、ジョン・ポラーニイとともに、一連の会議のもっとも活動的な参加者であった。

一九六〇年にモスクワで開催された記念すべきパグウォシユ会議にも両名が参加し、アンドレイ・サハロフを含むロシアの科学者とともに、核武装放棄への運動に加わった。後にノーベル化学賞を受賞したポラーニイは、一九七九年に「核戦争の脅威」(The Danger of Nuclear War)を著している。また、パグウォシユ運動は一九九五年にノーベル平和賞を受賞した。

モスクワの会議からの帰途、スィラードはウィーンに立ち寄り、そこから友人のヨーゼフ・リトヴァーンに電話した。リトヴァーンはブダペストに来ないのかと誘ったが、一九一九年に彼を拘留し、また一九四四年にユダヤ人狩りをおこなったハンガリーの過激派が怖いので、ハンガリーに戻ることはないと言ったという。彼はオーウェルの「一九八四年」を読む勇気を持たなかった。それほどまでに、全体主義レジームの

記憶が彼の中に生きていた（筆者もまだ、一九五六年動乱の失敗の後、同様な心理状態に置かれ、「一九八四年」を最後まで読み切ることができなかったことを覚えている）。

ハンガリーにたいするスィラードの留保は真実を含んでいる。トルーデイ・ヴァイスの勇気ある助言で、筆者はハンガリーの出版社と掛け合い、*His Version of Facts*の翻訳に関心があるかどうか尋ね回ったことがある。この著書はほとんどが一九四五年以降の論文を集めたもので、政治的な部分もかなりあり、どちらかというアメリカにたいしてやや薔薇色で描き過ぎで、ソ連にたいしては十分に赤いとは言えないものだった。一九六〇年代のブダペストの出版社は、「政治的に適切なものであれば、論文集を出すのにやぶさかでありません」と応えたが、ハンガリーはその出版のチャンスを失った。アメリカでも、一〇年の躊躇を経過

して漸く、マサチューセッツ工科大学出版局が、スライードの全集 *Collected Works* の第二巻と第三巻を出版する運びになったのである。

再び生物学へ

第二次世界大戦が終わり、スライードは長い歴史の間奏曲で中断していた生物学へ、再び関心を向けることになった。一九五〇年、彼はニールス・ボアに次のような手紙を書いている。

「厳密に言うと、私は自分の時間を、生命とは何かを発見するためと、世界を救済して生命を維持する努力のために分けて使ってきました。現在、世界は救いようのない状態にあります。ですから、今の私には生物学へもつと自由に割ける時間があります」。

近代物理学がどのようにして分析から原理の方へ先走ってきたかを経験したスライードにとって、来るべ

く近代生物学へ足を踏み入れるには絶好のチャンスでもあった。かなりの経験が蓄積され、実験手法も細かな所まで開発されてきたので、深い統合の原理を発見するのに機が熟していたと言えよう。例の衝動的な直感で、彼は「生物学はもはや存在しない」とも言っている。フレド・ライネスが学生に近代生物学の諸問題に関心を向けさせたいと思い、スライードに助言を求めた時のことを覚えていいる。彼の答えは、こうだった。

「君がやらなければならぬことは、その若い連中にまず、物理学の博士号を取らせることだ。その後なら、適切に生物学を学ぶことができるだろう」と。確かに、多くの優れた物理学者が生物学に誘惑されいる。ベーケーシ、チャルパーク、クーパー、クリック、デルブリュック、グレイサー、ジョセフソン、シュレジンガー、ヴィルキンスなどがそうだ。スライードはシカゴ大学の生物理

学教授になった。ミクロ生物学の実験状況を簡便化するためには、外的な条件を固定する必要がある。そこから、彼はアーロン・ノヴィックと協力して、化学状態、つまり「完全な物理的・化学的管理下で、バクテリアの再生産に必要な閉じた安定した環境」を開発した。この環境の中で、バクテリアの突然変異や自然淘汰、進化などが、種々に設定された栄養と変異条件のもとで研究することが可能になった。 *Newsweek* の一九五四年六月一八日号は、「快活で笑みを絶やさない物理学者が解説したように、ここで初めて、進化が目に見えるものになっている」と報じた。

このようにしてスライードは、突然変異、酵素反応、免疫反応、淘汰、老化の基本的諸問題にたいするアプローチの仕方を設定したのである。彼は「老化ヒット」 (*aging hits*) という概念を発展させた。つまり、

誕生時にセットされている、許容しうる染色体欠陥の数が生命の自然寿命を決定するという理解である。人々はより少ない欠陥を受け継ぐか、あるいは新しい欠陥を受け取る機会が少なくなることで、寿命が伸びる。人間の冷凍保存によつて、欠陥の堆積を抑制することができる。これは彼の物語 *The Mark Gable Foundation* のなかで語られている。

もちろん、最終的な結論はより専門的な研究者に託されていたが、生物学でノーベル賞を受賞したフランシス・ヤコブは、「スライードは場所から場所へとアイディアを運ぶ、知的なマルハナバチだ」と言い、ヤコブとノーベル賞を分け合ったジャック・モノーは、「皆にただであげるマオリの酋長のように、アイディアを気前よく分け与えていた」と言う。

モノーはコロンビア大学で「酵素活動のフィードバック制御」を講義

していた。経験から、砂糖があると、バクテリアは乳糖を消化するためにガラクトシダーゼを造り出すことが知られていた。スライードはモノーにたいし、「負のフィードバックがより効果的なものだ」とコメントした。つまり、砂糖がない時には、不必要に消化酵素を造らないような抑制作用があり、乳糖が登場したところで「抑制作用を不活動化」し、細胞がガラクトシダーゼを合成する。スライードのアイディアに沿つて、モノーは細胞における酵素の抑制メカニズムを探り、ノーベル賞を受賞した。彼はそのノーベル賞記念講演のなかで、導きの糸となったアイディアを与えてくれたスライードに感謝している（一九六五年）。

「もちろん、私も他の学生と同様に、二重否定が肯定と同等であることを学びました。私たちは、あまり深刻にはありませんが、エドガー・アラン・ポーによるポーカー・

ゲームの微妙な分析を思い出しながら、二重の欺き（ブラフ）と呼ばれるものの論理的可能性について議論しました。今になって、この仮説を真剣に捉えていなかった不明を、以前にも増して恥じています。まさにこのテーマこそ、レオ・スライードがパリを通過していた時に、セミナーの我々に提案してくれたものなのです。我々は漸く最近になって実験の最初の結果を獲得しましたが、その解釈について確信が持てませんでした。しかし、その時、我々の予備的な観察がスライードの洞察的な直感を裏付けることに気が付きました。スライードが見解を表明し終わった時に、二重の欺きの理論にたいする疑念が取り除かれ、私の信念が確立されました」。

後になって、スライードは彼の第一の研究テーマ、情報処理に戻っている。脳がどのようにして学習するのかを、「記憶と記憶力」にもとづ

いて構想しようとするものだった。友人のニコラス・クルティに自分の理論を、怪しげな笑みを浮かべて説明したことがある。「うまく機能しないが、でも間違っていると証明することはほとんど不可能なんだ」と。

癌に冒されて

「父母を敬い、地上での長命を願え」という戒律がある。スライードは別のものを提案する。「子供を敬え。彼等の言葉に真摯に耳を傾け、無限の愛をもって話しかけよ」と。また、後になってこうも言っている。「六〇歳になったら、一六歳のように主張してはならない。もっとも、多くの場合、腐っていくのは知力ではなく、性格であるが」。

一九五八年、パグウォッシュ会議はオーストリアのアルプスで開催された。会議の後、スライードはウィーンを訪れ、物理学者には歓迎されな

いような奇妙なアイディアなどを喋っていた。ウィーン大学のヒガッツベルガー教授が、サバティカルイヤー（研究休暇年）をウィーンで過ごさないかと持ちかけた。理論物理や実験物理、放射線化学や構造生物学の優れた学校があるからということだった。この魅力的な提案を議論しながら、教授はスライードを南オーストリアヘドライブに連れていった。その途中、スライードの目が涙で一杯になっていてのを見て、教授は「どこか悪いのか」と尋ねると、「いや、田舎の風景がハンガリーを想い出させて」と言う。数マイル先がハンガリー国境だった。

翌春、ヒガッツベルガー教授はアメリカに電話して、ウィーンでのサバティカルが実現可能かどうか尋ねようとした。悲しい知らせだった。膀胱癌の疑いがあるということだった。

スライードはパグウォッシュ会議の

組織の仕事でストックホルムを訪れた折、カロリンスカ研究所で癌の研究を指導していたハンガリー生まれの医学教授ジョージ・クラインに会い、感じる痛みを説明した。そこから、進行した膀胱癌であることが判明した。望ましい治療として、広い範囲にわたる患部の除去と、線による再発予防が推奨された。しかし、スライードは外科手術を信用しておらず、クラインに癌と免疫学にかんする生物学のより詳しい説明を求めた。妻のトウルデイは膀胱癌にかんする患者のデータを収集した。そこから判明したことは、外科手術を受けた四〇人のうち、助かったのはたったの一人だけだった。

一九六〇年一月七日、スライードはニューヨークのメモリアル病院の八二二号室に運ばれた。医師でもあるトウルデイの助けもあって、それまでにイオン放射線や細胞の再生について良く分かっていたし、癌治療

の文献についても研究していた。八
一二号室はさながら情報センターの
ようだったが、不満があった。「この
部屋の電話が隠されているのは構わ
ない。だが、ベルの音に耐えられな
いのが問題なのだ」と。

スライドは病室で学び、ハード
に仕事をしたが、最終的に電子顕微
鏡による二つの腫瘍の除去と、合計
で六〇シーベルになる線の治療を
受けることを決断した（全身への五
シーベルの照射は五〇%の確率で死
をもたらす。スライドは当初、局
所照射で九〇シーベルを要求してい
た）。放射線治療の間、彼は時折、病
室を抜け出し、近くにあるレストラ
ン「ブダベスト」に行き、ハンガリ
ー料理を楽しんでいた。

また、病室では論文を口述筆記さ
せていたが、ある論文で *The*
Tragedy of Man の最後の場面を回
想している。このイムレ・マダーチ
の叙事詩的な戯曲は、一〇歳の時か

らスライドが愛読していたものだ
った。「連鎖反応」にかんする章の冒
頭には、この戯曲から、冷却する太
陽にたいする科学の闘いが引用され
ている。この戯曲が書かれた一九世
紀には、物理学者はまだ核エネルギー
のことを知らなかった。戯曲の最
後の場面では、太陽は熱源として辛
うじてあるものの、すでに地球は凍
り付いており、わずかな人間だけが
生存のために闘っている。

今、我々はこの果てしない
雪原をただ放浪するのみ、
死は虚ろな眼で我々を凝視する。
我々のすぐ足元が赤道だ。
科学はついに自らを破壊した。
ああ、何でも想像するが良い。
お前の中の動物が蠢いている。
新たな移住者が続いてやってくる、
アザラシは僅かだ。

もしお前が神なら、後生だから、
お願いだ。
人間を減らして、アザラシを増や

してくれ。

マダーチを引用した後で、スライ
ドは勇敢な努力を続けて、僅かな
希望を求めめる必要を強調している。
一九六〇年二月一三日、きつい放射
線治療が終わり、スライドの膀胱
癌は焼き尽くされた。尿からは腫瘍
の兆候は何も見られなかった。その
後、幾月か続けられた定期検査でも、
癌の兆候は発見されなかった。ス
ライドは平常生活に戻り、世界を救
うための「討論や出版を続けた。
そして、一九六〇年五月、スライ
ドとトゥルディはワシントンに向
き、「平和のための原子力」賞を受賞
した。「運命によって、原子炉を開発
することに選ばれた」科学者への授
与であった。

突然の死

南カリフォルニアの太平洋岸にあ
るラ・ジョラのソーク研究所（*The*

Salk Institute) は、スイラードが発起人の一人として設立した生物学と社会科学の研究所だった。ポリオワクチンでノーベル賞を受賞したジヨナス・ソークを説得して、彼の名前と名声を冠して設立したものだ。DNA 構造でノーベル賞を受賞したフランシス・クリックや他の近代生物学の研究者がそこに招聘された。コスモポリタンのスイラードは太平洋に恋をし、一九六四年一月にソーク研究所に移り、デル・カロ・モテルにあるコテージにトウルデイと住み、研究所での議論を楽しんでいた。恐らく、この時が彼の人生でもっとも幸せな時間だっただろう。

一九六四年五月三〇日未明、トウルデイはレオがいつになく静かに眠っているのに気づいた。強い心臓発作(冠状血栓)で、永遠の眠りについたのだった。享年六六歳だった。医師でもあるトウルデイは検死解剖を望んだ。泌尿器系統には何の異常

も見つからなかった。癌は完全に除去されていた。故人を偲び、エドヴィン・レンナウは、「彼が目を覚ましていたなら、神は彼を召されることはなかった」と述懐している。

レオ・スイラードの遺体は茶毘にふされた。彼の生前のアイディアによれば、遺灰を明るいカラーの気球に乗せて、そこから太平洋に蒔くというものだった。これは少なくとも子供たちを喜ばせるものであったが、実際には、遺骨はサンディエゴのキプレス・ヴェー墓地に、その使徒宮殿の納骨堂の、五メートルの高さにもなる天井の頂き近くに埋葬された。ソークが言うように、「レオはランプを運びたいんじゃないくて、ライトを点けたいんだ」。スイラードの友人でかつ好敵手であったエドワード・テラーは、トウルデイに追悼の手紙を送っている。

「私はある休むことを知らぬ伝説的な人物、ファウスト博士のことを

思わずにはいられません。ゲーテの悲劇によれば、満足したその瞬間に死を迎えたのです」。

大使館だより

「在外選挙人名簿」登録申請はお早めに！

今年は夏に参議院選挙が実施されます。最近の報道によれば、七月一二日公示、七月二九日投票日となる可能性が高くなっています。

海外で投票を行うためには、先ず「在外選挙人名簿」への登録申請が必要です。

年齢満二〇歳以上で、引き続き三ヶ月以上お住まいの在留邦人の皆様の中で、この手続きを未だ済ませていない方は、旅券と引き続き三ヶ月以上住所を有することを証明する書類（在留届を三ヶ月以上前に提出している場合は不要）を持参のうえ、早め大使館領事部で登録申請を行っ

て下さい。大使館での登録申請を経て「在外選挙人名簿」へ実際に登録されるまでに、通常二、三ヶ月程度かかりますので、ご注意下さい。

登録申請は本人自身でする必要があります。在留届の提出や変更、旅券の切替申請などの機会をご利用下さい。登録申請は窓口受付時間中はいつでも受け付けています。